5 Rd.

APR 2013

平成25年8月1日発行

Japan RACING PRESS

SUPER GT ROUND 5 SUZUKA

Super GT Series 2013

Round 5 SUZUKA

8/17-18

Text
島村元子

Editor
吉川絹恵

Photo
鉄谷康博
加藤智充
中村佳史
原　勝弘
小澤克仁

Special Thanks
榊原寿雄

Cover Photo
鉄谷康博

4月に開幕したスーパーGTもいよいよ後半戦に入り、その最初がロングランとなる第42回インターナショナル・ポッカ・サッポロ1000Kmだ。伝統の1000kmレースは昨年から国内最長が復活し鈴鹿の真夏の祭典としてすっかりお馴染みのレースとして定着している。通常のレースよりも距離が長い分、上位入賞者にはボーナスポイントが与えられるだけに激しいレースが予想された。

Pokka Sapporo 1000km
42nd INTERNATINAL POKKA SAPPORO 1000km

ウイダー モデューロ HSV-010 が待望の今季初勝利！

蒸し暑い一日となった決勝日。やや控えめなペース配分で序盤を消化、次第にポジション争いが激しくなる。まず予選2位の18号車がトップ23号車を追い立て逆転、レースを牽引する。一方、スタートから2時間を過ぎ、1台の車両がコース上に停止。これを受け、セーフティカーが導入される。この際、ピットイン直前だったことからガス欠を回避するため泣く泣くピットへ戻ったチームや、中には誤ったタイミングでピットインしたチームが続出。レース再開後にはいずれもピットストップペナルティを受けることとなり、レースは慌ただしい展開となった。

GT500 決勝結果

優勝	No.18	ウイダー モデューロ HSV-010	山本尚貴／フレデリック・マコヴィッキィ
2位	No.23	MOTUL AUTECH GT-R	柳田真孝／ロニー・クインタレッリ
3位	No.36	PETRONAS TOM'S SC430	中嶋一貴／ジェームス・ロシター
4位	No.12	IMPUL GT-R	松田次生／ジョアオ・パオロ・デ・オリベイラ カルソニック
5位	No.37	KeePer TOM'S SC430	伊藤大輔／アンドレア・カルダレッリ
6位	No.19	WedsSport ADVAN SC430	荒　聖治／アンドレ・クート
7位	No.17	KEIHIN HSV-010	塚越広大／金石年弘
8位	No.1	REITO MOLA GT-R	本山　哲／関口雄飛
9位	No.39	DENSO KOBELCO SC430	脇阪寿一／石浦宏明
10位	No.100	RAYBRIG HSV-010	伊沢拓也／小暮卓史

このあと、レースは23号車がトップを奪還。だがその背後にまたも18号車が迫り来る。レース開始から4時間が過ぎ、痛恨のオーバーランを喫した23号車の隙をついた18号車が逆転に成功! このままチェッカードフラッグまでトップを死守し、ついに待望のシーズン初優勝を果たした。また、終盤に激化した3位争いは、No.36 PETRONAS TOM'S SC430（中嶋一貴/ジェームス・ロシター組）が逆転、第2戦以来の表彰台に上がった。

ポールのSUBARU BRZ R&D SPORTがついに優勝！

今回も№61 SUBARU BRZ R&D SPORT（山野哲也/佐々木孝太組）が予選で最速タイムをマーク！ 今季4回目のポールポジションを獲得する。決勝でも61号車の強さが目立つ展開となり、2位以下を大きく引き離し、周回遅れにしてしまった。だが、終盤に傷めたパーツの修復に迫られ、緊急ピットインを強いられる。だが、それまでに築き上げたマージンをうまく利用、一度はトップを譲ったが、瞬く間に奪還し、そのままフィニッシュ！ BRZに初優勝をプレゼントしている。一方、2位に続いたのが、今季から新体制で参戦している№52 OKINAWA-IMP SLS（竹内浩典/土屋武士/蒲生尚弥組）。ライバルたちが次々とトラブルで脱落する中、安定した速さを武器に着実なレース運びを見せ、うれしい初表彰台に立っている。

WINNER

GT300 決勝結果

優勝	№61	SUBARU BRZ R&D SPORT	山野哲也／佐々木孝太／井口卓人
2位	№52	OKINAWA-IMP SLS	竹内浩典／土屋武士／蒲生尚弥
3位	№62	LEON SLS	黒澤治樹／黒澤　翼／中谷明彦
4位	№88	マネパ ランボルギーニ GT3	織戸　学／青木孝行
5位	№16	MUGEN CR-Z GT	武藤英紀／中山友貴
6位	№11	GAINER DIXCEL SLS	平中克幸／ビヨン・ビルドハイム
7位	№0	ENDLESS TAISAN PORSCHE	峰尾恭輔／横溝直輝
8位	№5	Exe Aston Martin	加納政樹／安岡秀徒／阪口良平
9位	№3	S Road NDDP GT-R	星野一樹／佐々木大樹／ルーカス・オルドネス
10位	№33	HANKOOK PORSCHE	影山正美／藤井誠暢

2nd

3rd

THE WINNER CLOSE-UP

No.18 ウイダーモデューロ HSV-010

Text by Motoko Shimamura
Photo: Yasuhiro Tetsutani

新コンビによる待望の勝利は、同時にミシュランタイヤ&HSV-010による初優勝に

42回目を迎えた伝統の鈴鹿1000km。真夏の一戦としてSUPER GT発足以前から続く、鈴鹿サーキットの歴史あるレースとして知られる。SUPER GT第5戦のシリーズ戦としては、後半戦のスタートにあたり、そろそろシリーズチャンピオンを意識する戦いが始まろうとしていた。

そんな中、予選から安定した速さを見せていたのがウイダー モデューロ 童夢 レーシング率いる18号車のウイダー モデューロ HSV-010。予選で2位を獲得、フロントローからスタートを切ると、レース序盤から早速ポールポジションの1号車GT-Rをプッシュ、逆転後はさらにペースアップし、後続の追随を退ける力強い走りを見せた。

レースは、開始から2時間を経過した頃にコースサイドで火災が発生。セーフティカーが導入されるが、このタイミングで慌ててピットインし、ルティンワークを済ませたチームがルールによってペナルティが科せられることになったが、18号車は依然として上位に君臨。長丁場のレースであるため、23号車のGT-Rと幾度となくトップ争いを繰り広げながら最後の最後まで勝利の行方がどちらに転ぶかわからない激戦を演じた。

チームは今季、新たに山本尚貴とフランス人のフレデリック・マコヴィッキィ選手を招へい。マコヴィッキィは日本での初GTレースながら高い順応性と、もともと慣れ親しんだミシュランタイヤの特性を引き出す走りを披露。チームを移籍した山本とともに速さを証明してきたが、これまで思うような結果を残せずにいた。しかし、車両の足下を固めるタイヤの力強いパフォーマンスにも支えられ、終盤は優勝を確信した走りを見せてトップでチェッカードフラッグをくぐり、両者そろってSUPER GT初優勝を遂げることとなった。

Special Eye

Photo by: **Hisao Sakakibara**